



Title	横穴式石室出土土器の器種構成の変遷とその背景
Author(s)	野島, 悠之
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 531-540
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105068
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

横穴式石室出土土器の器種構成の変遷とその背景

野 島 悠 之

はじめに

古墳時代後期には、横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳（以下、横穴式石室墳）から、多くの土器が出土する。それらの研究は、生産地での編年が確立したことで時期が比定し易く、生産地・消費地共に、豊富な資料数がある須恵器供膳具を主な対象にして進められている。

そのため、本論では、先行研究ではほとんど対象にされない横穴式石室墳の小型貯蔵具に対して土器組成を検討し、器種構成の時期的変遷を扱う。そのうえで、古墳時代後期における葬送儀礼の在り方について、考察する。

1. 先行研究の整理と問題の所在

須恵器は土師器とともに葬送儀礼の中で飲食器として使用され、畿内型横穴式石室では、土師器とともに玄室内に持ち込まれたと想定されている（寺前 2012 : p. 21）。このように、土器は葬送儀礼を行う上で、儀礼執行者や参列者と密接な関係にあると推定できる。このため、土器を扱った先行研究を対象にして、先行研究を整理することで、葬送儀礼の在り方へアプローチすることを図る。

（1）横穴式石室墳の土師器について

一部の先行研究では、須恵器に加えて土師器も扱われてきた。例えば、藤原学は横穴式石室墳に少量の土師器が搬入されていることに注目し、土師器は横穴式石室内の共食の場で、容器としての特殊な役割を果たしたと指摘した（藤原 1985 : pp. 566-567）。

また、寺前直人は、古墳時代中期中葉（TK216 型式期）には須恵器の器台・甕・壺といった大型須恵器に、土師器・須恵器の高杯が伴う土師・須恵複合様式が成立し、南九州から関東まで広い地域に斉一的に採用されていたことを指摘している（寺前 2018）。寺前は古墳時代後期には、土師・須恵複合様式を継承しつつも単品の小壺を残しつつ、土師器の器種の比率が低下したと述べている。

このように、横穴式石室墳の土師器を対象とした先行研究は一定数あるものの、須恵器を対

象にした研究と比べると、低調である。

（２）横穴式石室墳の須恵器について

先行研究では、横穴式石室墳の須恵器は、定量的な検討が進められてきた。例えば、森本徹は TK47 ～ TK209 型式期の須恵器の供膳具を基準に「有蓋高坏主体型」・「蓋坏主体型」の 2 類型を設定し、その背景を葬送儀礼の規範の差異に求めた（森本 2012）。

また、研究史では須恵器供膳具の蓋と身のまとまりが重視されてきた。例えば、石井智大は法量、内面調整等の諸要素から勝福寺古墳の須恵器坏蓋・坏身は同時に製作、焼成されたまとまりを保持したまま納められたものと評価した（石井 2007）。石井はその背景を、勝福寺古墳の須恵器は生産段階ですでに特定の古墳に供給することを予定した葬送用の品であるとの意識されていたためと推察している。

このように、①生産地での編年が確立しており（田辺 1981 など）、時期比定が容易であることに加え、②出土数量が多く定量的分析に耐えうる資料が多いこと、③製作・焼成時のまとまりがわかる事例が多く、生産地からの流通体制に言及できうることから、横穴式石室墳出土の須恵器の内、供膳具が主な対象となる傾向にある。

（３）問題の所在

横穴式石室墳の土器研究に対し、①数量の多い須恵器の評価が第一になり、土師器はそれに追従するものとして評価されてきた、②須恵器の中で時期比定し易い供膳具が主対象となり、それ以外の器種の研究が低調である、という問題点が示された。

2. 議論の前提と分析の方針

先述した問題点に対応するため、①供膳具以外の器種、かつ②土師器と須恵器で類似する機能を持つ器種を選定する。そのため、群集墳や首長墳から一定の数量が出土し、須恵器と土師器という器質を横断した検討ができる、小型貯蔵具を対象とする。ここでいう小型貯蔵具とは、土師器・須恵器の直口壺、須恵器の短頸壺、須恵器の提瓶である（図 1）。

対象とする時期は TK47 ～ TK217 型式期とする。

検討方法は、各群集墳・首長墳の土器組成をグラフ化し、主体とする土器ごとに該当する古墳数をカウントする。ここでいう、「主体とする」とは、土器組成の中で 50%以上の割合を占めることである。このため、仮にある古墳で器種 A・器種 B が共に 50%出土している場合、当該古墳において、器種 A・B ともに主体であると定義する。特定器種の割合が 50%を越えない場合、当該古墳は主体とする器種はないものとして扱う。

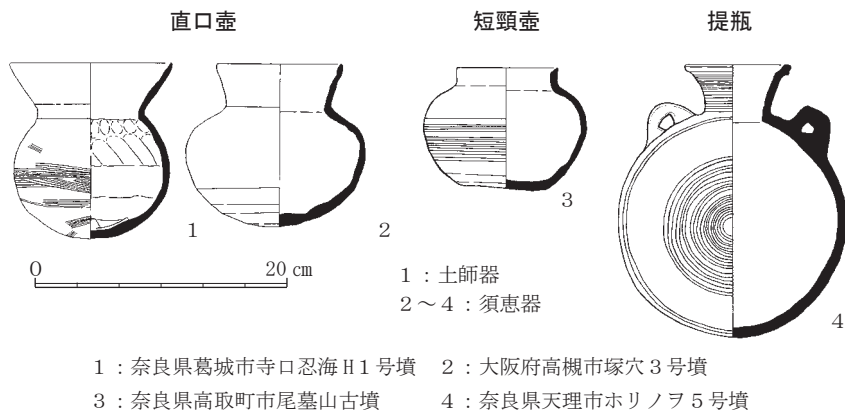


図1 本論における小型貯蔵具の器種分類

主体とする土器により、表1の通り4つのパターンを定義する。このパターン分けに基づき、以下分析を進める。

表1 主体とする器種のパターン

主体とする器種	パターン
土師器直口壺	①
須恵器直口壺	②
須恵器短頸壺	③
須恵器提瓶	④

3. 器種組成の整理と検討

先行研究では、奈良盆地で古墳の墳丘規模や埋葬施設を問わず、後期古墳に数多くの土師器が持ち込まれていたと指摘されている（寺前 2005）ため、大和地域を対象とする。

前述の通り、ある古墳にて器種A・器種Bが共に50%出土している場合、器種A・Bともに主体とする、と定義する。このため、同一古墳を器種Aについて主体とする古墳、器種Bを主体とする古墳、2度にわたってカウントしている場合があることを留意されたい。

例えば、寺口忍海古墳群 D27 号墳は土師器直口壺、須恵器短頸壺ともに50%であり、この場合①が1基、③も1基として扱う。

まず初めに、大和の群集墳ごとに主体とする土器の時期的変遷を検討する。

（1）大和の群集墳について

ア：寺口忍海古墳群 TK47 型式期では①が1基、②、③がそれぞれ1基であり、TK10 型式期は①が5基、③が7基、④が4基認められる。

TK43 型式期では②が1基、③が5基、TK209 型式期では①が2基、③が2基、④が1基であり、TK217 型式期では①が1基、③が3基である。

そのため、寺口忍海古墳群ではTK43 型式期を境にして、古墳群の中で①の比率が大きく減じ、③が大勢を占めることが明らかとなった。

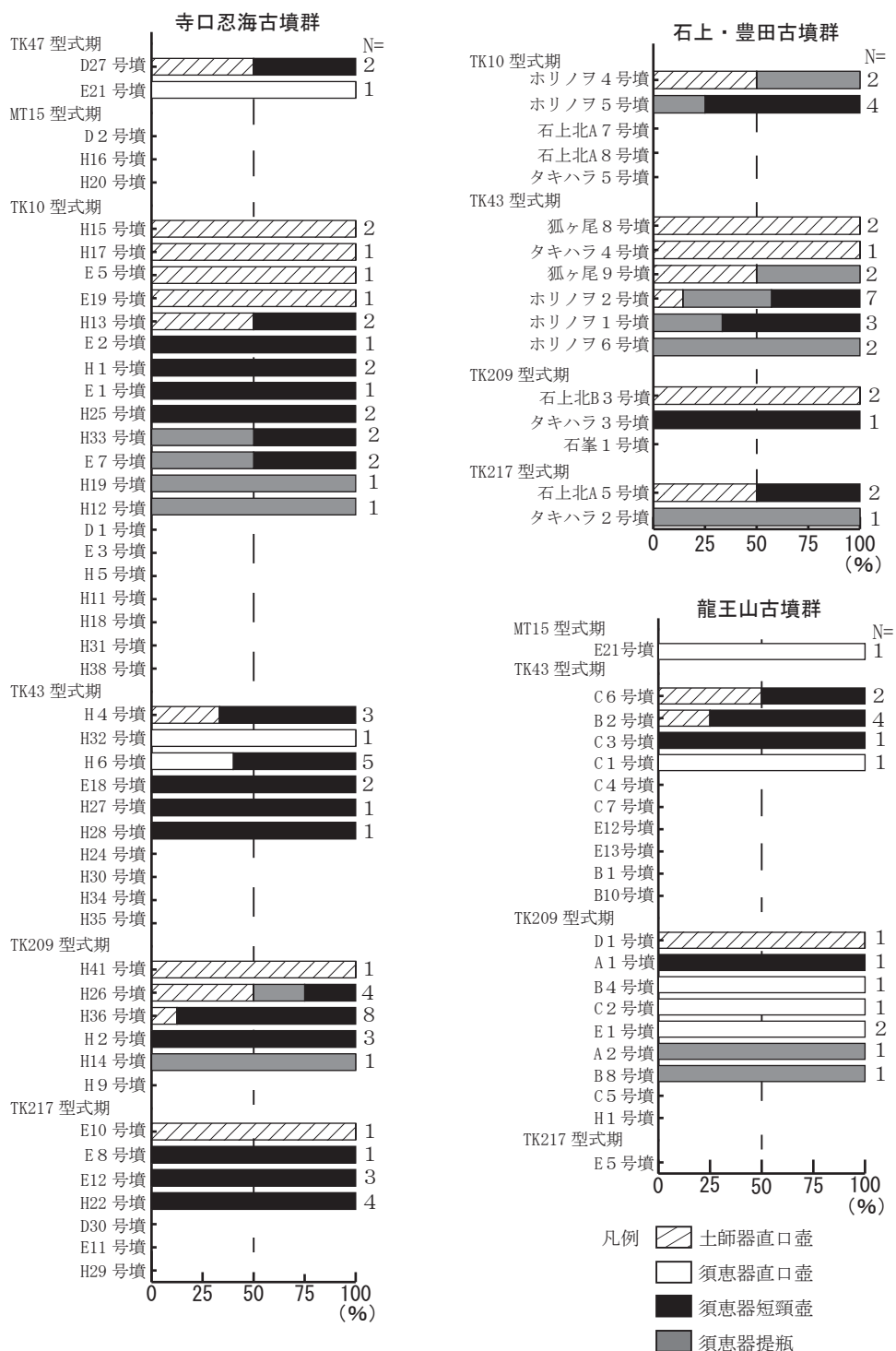


図2 各古墳群の小型貯蔵具の組成 (大和)

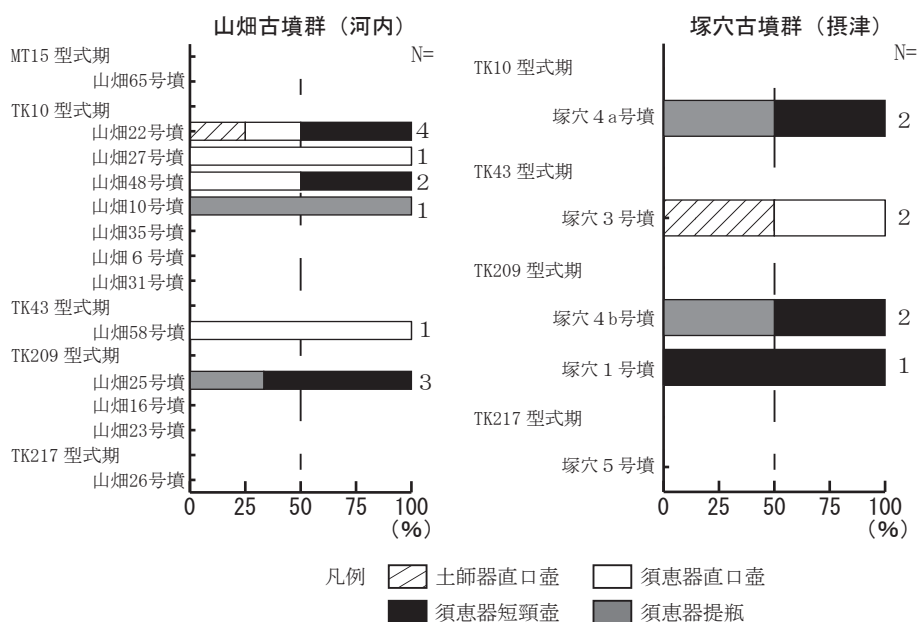


図3 各古墳群の小型貯蔵具の組成（河内・摂津）

イ：石上・豊田古墳群 TK10 型式期では①、③、④がそれぞれ1基、TK43 型式期では①が3基、③が1基、④が2基であり、TK209 型式期では①、③が1基、TK217 型式期では①、③、④が各1基である。

そのため、石上・豊田古墳群では、TK10～TK217 型式期まで一貫して、①、③、④の3者が並立することが判明した。ただし、TK43 型式期の古墳では、③、④が合わせて半数を超えているため、①が低調になっていることが窺われる。

ウ：龍王山古墳群 MT15 型式期では②が1基、TK43 型式期では③が3基、②が1基、TK209 型式期では①、③がそれぞれ1基、②が3基、④が2基となる。

よって、龍王山古墳群ではいずれの時期でも②、③、④が並立することが明らかとなった。

（2）他地域の群集墳について

大和の事例を他地域の群集墳と比較し、大和で見られた時期差が他地域にも援用可能か検証する。他地域の群集墳として、大和に隣接している地域に所在し、かつ、古墳数が一定数ある群集墳として、河内の山畑古墳群、摂津の塚穴古墳群を対象とした。

ア：山畑古墳群 TK10 型式期では②が2基、③が2基、④が1基であり、TK43 型式期では②が1基、TK209 型式期では③が1基である。

したがって、山畑古墳群では②、③、④が併存することが明らかとなった。

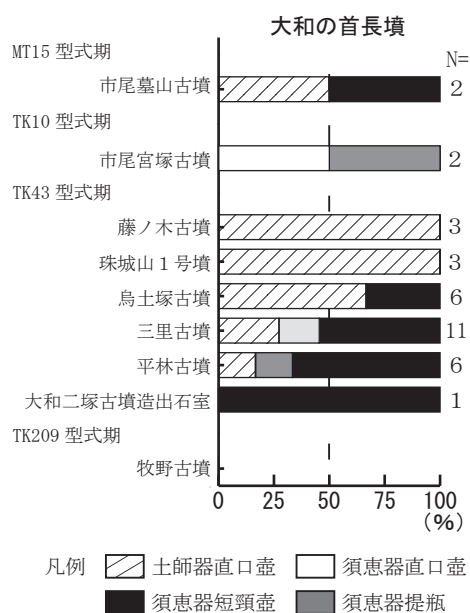


図4 首長墳出土小型貯蔵具の組成

例えば、藤ノ木古墳・珠城山1号墳では、出土した小型貯蔵具はすべて土師器直口壺であった他、烏土塚古墳では土師器直口壺が主体で、①に分類される。

一方で、当該期には三里古墳や平林古墳など、③に該当する例も認められ、①と③が併存していることが窺われる。

(4) 小 結

大和の群集墳について、土師器直口壺が主体とする古墳は、時期が下るにつれて少数となり、特にTK43型式期以降は土師器直口壺を主体とする古墳は、いずれの群集墳でも低調になる。一方で、須恵器短頸壺、須恵器提瓶が主体とするTK43型式期以降に増加する傾向にある。

他地域の群集墳について、TK10型式期以降、ほとんどの古墳にて土師器の直口壺を主体とする古墳はみられない。一方で、それらの群集墳では、須恵器短頸壺、須恵器提瓶を主体とする古墳が散見される。

大和の首長墳では、MT15型式期からTK43型式期にかけて、土師器直口壺・須恵器短頸壺が主体とする古墳が併存することが、明らかとなった。

4. 考 察

先の検討により、群集墳では土師器直口壺から須恵器短頸壺・提瓶へと、主体とする器種が

イ：塚穴古墳群 TK10型式期では③、④がそれぞれ1基、TK43型式期では①、②がそれぞれ1基、TK209型式期では③が2基、④が1基である。

よって、塚穴古墳群では③・④が併存することが判明した。

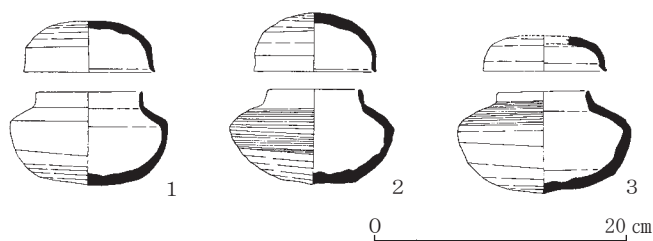
(3) 大和の首長墳について

最後に、大和の群集墳を大和の首長墳の土器組成と比較し、階層性によって土器組成とその変遷に差異があるのかを検討する。

大和の首長墳では、MT15型式期から①が認められる。例えば、市尾墓山古墳では土師器直口壺が1個出土している。

TK43型式期でも①が継続して認められる。

移ることが判明した。以下では、それら小型貯蔵具の機能の違いを検討したうえで、主体とする器種が直口壺から短頸壺・提瓶へと移った背景を分析する。



（１）直口壺と提瓶・短頸壺の用途の違い

直口壺は神酒を供献、または給仕する儀礼用土器としての用途が想定されている（中久保 2018 : p. 315）。

それに対し、提瓶は液体を携行することができる容器であることから、筆者は古墳外であらかじめ提瓶内に液体を入れ、古墳に持ち込んだものと想定している。提瓶は中国や朝鮮半島で酒器として使用されていた扁壺の影響を受け、儀礼的飲酒にかかわる酒器として採用されたことが指摘されている（小池 2010）ことから、中に入れていた液体とは、酒であったと考えられる。

また、短頸壺は口縁部高が低く、蓋をかぶせることが可能な器形である。このため、筆者は、短頸壺は中に液体を入れたうえで、密閉して運ぶための器種であると想定している。短頸壺に注いだ液体とは、先述の直口壺・提瓶の例を参考にすると、酒であった可能性が高い。

このことから、筆者は直口壺と短頸壺・提瓶とは、酒を入れるという点では共通しているが、酒を参列者の器に分配する直口壺、酒を運搬する短頸壺・提瓶という役割の違いがあったものと考えている。

（２）器種構成の変化について

大和の群集墳では時期が下るに従い、土師器直口壺を主体とする古墳が減少し、須恵器短頸壺、提瓶を採用する古墳が多数認められるという、器種構成上の変化があった。先述した直口壺の機能を考慮すると、直口壺を用いた共飲では、墳丘裾や墳丘上の大甕から直口壺に酒を移し、直口壺から参列者各人の器に酒を注ぐ、という行為がなされたと想定される。

一方で、短頸壺・提瓶を用いた共飲では、集落等、古墳外の場合にて短頸壺・提瓶に酒を注ぎ、古墳にて各参列者の器へと配分する行為へと簡略化されたものと思われる。

このような簡略化は大和では、須恵器短頸壺が主体とする寺口忍海 D27 号墳（TK47 型式期）から散見され、TK43 型式期以降に本格的に多くの古墳で認められる。

- 1 : 奈良県葛城市寺口忍海 H1 号墳
2 : 奈良県葛城市寺口忍海 E7 号墳
3 : 奈良県平群町三里古墳

図5 須恵器短頸壺と蓋のセット関係の諸例

（３）簡略化の背景について

簡略化の背景について考察するため、TK43 型式期前後で群集墳の築造にどのような変化があったか、先行研究を整理する。

TK43 型式期以降、旧国の畿内だけでなく、地方でも横穴式石室墳の数が増加したと考えられる。例えば、森岡秀人は、6 世紀中葉を過ぎてから、各地で木棺直葬墓と横穴式石室の交代が起こり、近畿地方中央部の木棺直葬墓をほとんど見ない地域でも横穴式石室の築造を持って群集墳の築造が始まると指摘されている（森岡 1989 : p. 228）。

また、吉備の横穴式石室を検討した笹栗拓は、6 世紀後半に大型の横穴式石室と形態的な特徴を共有する石室が地域に普及し、群集墳築造が活発化したことを指摘する（笹栗 2010 : pp. 48-51）。

このように、TK43 型式期以降、群集墳での古墳数が増加した結果、横穴式石室墳の築造とそれに伴う葬送の祭式は、前代よりも多くの人々に開かれたものとなった。古墳における祭式が一部の有力者により独占されるものではなくなったことで、横穴式石室墳において、共飲の在り方の重要性が薄れた結果、前述のした共飲の簡略化がなされたものと考えられる。

TK43 型式期以後、大型器種である器台・広口壺の生産が終わるとの指摘（田辺 1981）も、当該期に古墳において、共飲の重要度合いが低下したことを裏付ける。

（４）首長墳での葬送儀礼の動向

大和の首長墳では TK43 型式期以降も土師器直口壺が主体とする古墳が残る傾向にある。

TK43 型式期以降も土師器直口壺が主体とする首長墳が残るのは、古墳時代前期以来、古墳時代後期に至るまで継続してきた、酒を大型貯蔵具（二重口縁壺や須恵器の大甕等）に入れ、直口壺を経由して参列者の器に注ぐ、という行為が TK43 型式期においてもなお、大和の首長には重視されていた可能性が高い。

被葬者の次代の首長にとって、前期古墳以来の共飲の在り方を保守的に継承することは、葬送の場にて自らの権力を正当化する意図があったものと思われる。

おわりに

古墳時代後期における土師器・須恵器の小型貯蔵具の組成を検討した。その結果、大和では TK47 型式期から共飲の簡略化がはじまり、TK43 型式期以降に簡略化された儀礼を執行する古墳数が増加したことが明らかとなった。

今回は大和・河内・摂津と畿内の 3 地域を扱ったが、今後は播磨・丹波・吉備等の地域にも対象を広げて検討していく余地があると考えている。

謝 辞

本稿は2022年度に大阪大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものです。修士論文の執筆にあたって、福永伸哉教授・高橋照彦教授・上田直弥助教から懇切にご指導を賜り、研究室の先輩・後輩からもご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 石井智大 2007「古墳への須恵器の供給とその背景」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊 大阪大学勝福寺古墳発掘調査団、大阪：pp. 239-258
- 小池 寛 2010「須恵器提瓶再考」『京都府埋蔵文化財論集 第6集—創立三十周年記念誌—』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp. 175-182
- 笹栗 拓 2010「横穴式石室の展開過程と地域社会の構造—吉備の分析を中心に—」『古代学研究』第188号 古代学研究会、大阪：pp. 39-58
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店、東京
- 寺前直人 2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団、大阪：pp. 447-458
- 寺前直人 2012「横穴式石室導入前後の古墳における土器組成」『駒沢史学』第77号 駒沢史学会、東京：pp. 1-24
- 寺前直人 2018「須恵器の儀礼—土師器との比較をととして—」『季刊考古学』第142号 雄山閣、東京：pp. 38-42
- 中久保辰夫 2018「土師器直口壺と古墳時代土器の特質」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室30周年記念論集—』大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 315-326
- 藤原 学 1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米壽記念獻呈論文集 乾』末永先生米寿記念会、奈良：pp. 545-569
- 森岡秀人 1989「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』吉川弘文館、東京：pp. 207-245
- 森本 徹 2012「横穴式石室と土器」『菟原Ⅱ—森岡秀人さん還暦記念論文集—』菟原刊行会、兵庫：pp. 485-496

遺跡文献

奈良県

- 泉 武（編）1998『石上・豊田古墳群狐ヶ尾8号・9号墳』天理市埋蔵文化財調査報告 第6集 天理市教育委員会、奈良
- 泉森 皎（編）1975『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ』奈良県文化財調査報告書 第20集 奈良県教育委員会、奈良
- 泉森 皎・河上邦彦（編）1976『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ』奈良県文化財調査報告書 第27集 奈良県教育委員会、奈良
- 伊達宗泰・小島俊次（編）1956『大和国磯城郡大三輪長穴師 珠城山古墳』奈良県教育委員会、奈

良

伊達宗泰・岡幸二郎（編） 1972『烏土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊 奈良県教育委員会、奈良

河上邦彦（編） 1977『平群三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊 奈良県教育委員会、奈良

河上邦彦（編） 1984『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第5冊 高取町教育委員会、奈良

河上邦彦（編） 1987『牧野古墳』広陵町文化財調査報告第1冊 広陵町教育委員会、奈良

河上邦彦・松本百合子 1993『龍王山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第68集 奈良県立橿原考古学研究所、奈良

木場幸弘（編） 2018『市尾宮塚古墳発掘調査報告書』高取町文化財調査報告第42冊 高取町教育委員会、奈良

小島俊次（編） 1962『大和二塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第21冊 奈良県教育委員会、奈良

奈良県立橿原考古学研究所（編） 1990『藤ノ木古墳』斑鳩町・斑鳩町教育委員会、奈良

坂 靖（編） 1994『平林古墳』當麻町埋蔵文化財調査報告第3集 當麻町教育委員会、奈良

吉村幾温・千賀 久（編） 1988『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告第1冊 新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、奈良

大阪府

荻田昭次 1977「Ⅳ 古墳時代」『河内四條史』第2冊 資料編 四條市史編纂委員会、大阪

北原 治（編） 1993『塚穴古墳群』高槻市文化財調査報告書第16冊 高槻市教育委員会、大阪

東大阪市教育委員会（編） 1973『山畑古墳群1』東大阪市文化財調査報告第1集 東大阪市教育委員会、大阪

枚岡市史編纂委員会（編） 1966『枚岡市史』第3巻 大阪府枚岡市役所、大阪

挿図表出典

図1：1. 吉村・千賀（編）1988 2. 北原（編）1993 3. 河上（編）1984 4. 泉森（編）1975

図2～図4：筆者作成

図5：1・2. 吉村・千賀（編）1988 3. 河上（編）1977

表1：筆者作成